

ウメ

昨日(19日)は二十四節気の「雨水(うすい)」でした。いままで降っていた雪が雨に変わり、少しずつ陽気が兆してくるころです。

「梅一輪 一輪ほどの暖かさ」の句にもあるように、「春」は百花の魁(さきがけ)、ウメによって選ばれてきます。寒中に香り高く凛(りん)と咲く花は、「四君子」「歳寒三友」の一員に選ばれ、古くから親しまれてきました。

ウメの故郷は中国。日本へは奈良時代以前に渡来したと

か。寒中に気高く咲く花に古人は魅せられ、新参者であるにもかかわらず、『万葉集』では最多のハギに次ぐ登場です。



ウメで忘れてはならない人がいます。菅原道真公です。無実の罪で太宰府に流されるとき、愛培のウメの木に向かって、「東風(こち)吹かば句ひおこせよ梅の花 主なしとて春な忘れそ」と。のちに一枝が、道真の元に飛んでいったという「飛梅」の伝説は有名で、ウメには呪力があると信じられていました。(清水美重子)

ビワ

寒さが増す中、ビワは大きな葉を集めた枝先に円錐花序を立て、白い花をたくさんつけて甘い香りを放っています。防寒対策でしょうか。薄茶色のビロードに包まれたつぼみは、寒風を避けるかのようにつむぎ加減に、下の方から順次ほころびていきます。

晴れて暖かい日に咲いた花には、メジロやミツバチなどが吸蜜に訪れて花粉媒介するので実を結びますが、寒波に襲われたときは花が痛み、虫



も来ないので実りません。

そんなわけで、ビワをはじめとして寒い時期に開花する植物は、無駄を覚悟で多くの花をつけ、かつ花期も長いものが多いのです。

ビワは漢名「枇杷」の音読みで、葉、または実の形が楽器の琵琶に似ているのが語源。昔は「枇杷を植えると病人が出る」といって嫌いましたが、最近は薬効が見直され、せんじて飲んだり、入浴剤にしたりと、「ビワの葉健康法」なるものが盛んです。(清水美重子)

スイセン

冬でも暖かい淡路島南東部の灘水仙郷では、いまスイセンが花盛り。越前海岸や伊豆半島と並ぶ一大群生地、紺碧の海に向かって急斜面を埋め尽くす花の液は、実に壮観で、甘い香りに包まれたそこだけが、もう春です。

一般的に親しまれている日本のスイセンは、フサザキスイセンの変種で、地中海沿岸がふるさとです。唐の時代にシルクロードを通過して、はるばる中国へ。その野



生化した球根が、また海流に乗ってわが国の海岸に流れ着き、長旅を終えて安住、繁殖したのが、日本スイセンの由来といわれています。

和名は、漢名「水仙」の音読みで、元をたどれば、ギリシャ神話に登場する美青年ナルシッソスにつながります。妖精エコーの愛を拒み、泉に映った自分の姿に怒った末に果て、スイセンの花に化したという花物語。そのせいでしょうか。こんなに群れ咲いているのに、何となく寂しそうです。

(清水美重子)